

Ⅲ. 住民参加型災害復興支援に関する能力強化研修（海外）

1. プログラム

Day	Date	Time	Activity
Day 1	Jan 31, 2006	-22:00	現地集合 All participants gather at Hotel Bandara Jakarta
Day 2	Feb 1, 2006	06:00-13:00	Jakarta to Ternate
		13:30-15:30	Lunch and Briefing on Agenda for the day
		15:30-18:30	Session 1: Visit children target group at IDP's camp (Target group of LML=Environment NGO and Daurmala=women's NGO)
		19:30-22:00	Dinner with 4 NGOs at Florida Restaurant (discuss & share experience with 4 NGOs)
Day 3	Feb 2, 2006	07:30-11:00	Cross the sea from Ternate to Sidangoli (Halmahera Island) and Road trip to Kao
		11:00-15:30	Session 2: Preparation for Facilitation Workshop at PEKKA's Regional Forum at the guest house
		16:00-18:00	Attend the PEKKA's Regional Forum and Facilitation of the workshop with women leaders
		18:00-20:00	Dinner at hotel
		20:00-22:00	Attend PEKKA's Cultural Night (Part of the PEKKA's regional forum) and Japanese share their cultural performance
Day 4	Feb 3, 2006	08:00-09:30	Trip to Tobelo
		10:00-12:00	Session 3: Meeting with World Vision Indonesia (WVI)
		12:00-13:00	Lunch
		13:00-14:30	Visit to BPD (WVI's target group)
		14:30-16:30	Visit to WVI's target group at Mamuya village
		19:00-20:00	Dinner at Hotel
		20:00-21:30	Sharing/Debriefing

Day	Date	Time	Activity
Day 5	Feb 4, 2006	08:00-10:00	Session 4 : Meeting with Padamara NGO
		10:00-12:00	Visit to Padamara's target group
		12:00-17:00	Lunch / Free time
		19:00-21:30	Session 5 : Workshop 1 - Conflict Analysis
Day 6	Feb 5, 2006	05:00-10:00	Depart to Sidangoli and cross the sea to Ternate
		10:00-11:00	Rest
		11:00-13:00	Session 6 : Workshop 2 – Special Issues
		13:00-14:00	Lunch
		14:00-17:30	Session 7 : Workshop 3 – Programming Peace Building
		19:00-21:00	Dinner at the Ternate town
Day 7	Feb 6, 2006	08:30-11:00	Session 8 : Workshop 4 – Facilitation Skill
		11:00-12:30	Closing Lunch
		13:30-20:00	Flight from Ternate to Jakarta Jakarta にて現地解散

2. 北マルク州（ハルマヘラ島）紛争の概要

1999年1月、インドネシアマルク州アンボンでのイスラム教徒（ムスリム）とキリスト教徒（クリスチャン）との衝突が、マルク諸島全体のムスリムとクリスチャンの大規模な宗教抗争に発展した。国軍や警察が介入する中、何度も行われた宗教指導者間の和解協議も功を奏さず、2000年6月末政府は、マルク州、北マルク州に非常事態宣言を発令した。

それまで平和な暮らしが営まれていた北マルク州（当時北マルク県）においては、1999年8月ハルマヘラ島北ハルマヘラ地域での衝突を境に、宗教抗争が始まる。ムスリムが優勢なガレラ郡地域を除くと、ハルマヘラ島北ハルマヘラ半島では、住民の大多数がキリスト教徒である。約160年前にオランダの宣教師が北ハルマヘラのトベロに渡って以来、この地域は、キリスト教宣教の本拠地となった。しかし、島の地形的な条件もあり南ハルマヘラへのキリスト教の拡大は進まなかった。そうした中、1975年島の中部地点であるマリフット地域に、地方政府が南ハルマヘラのマキアン島からムスリムのマキアン人を移住させている。

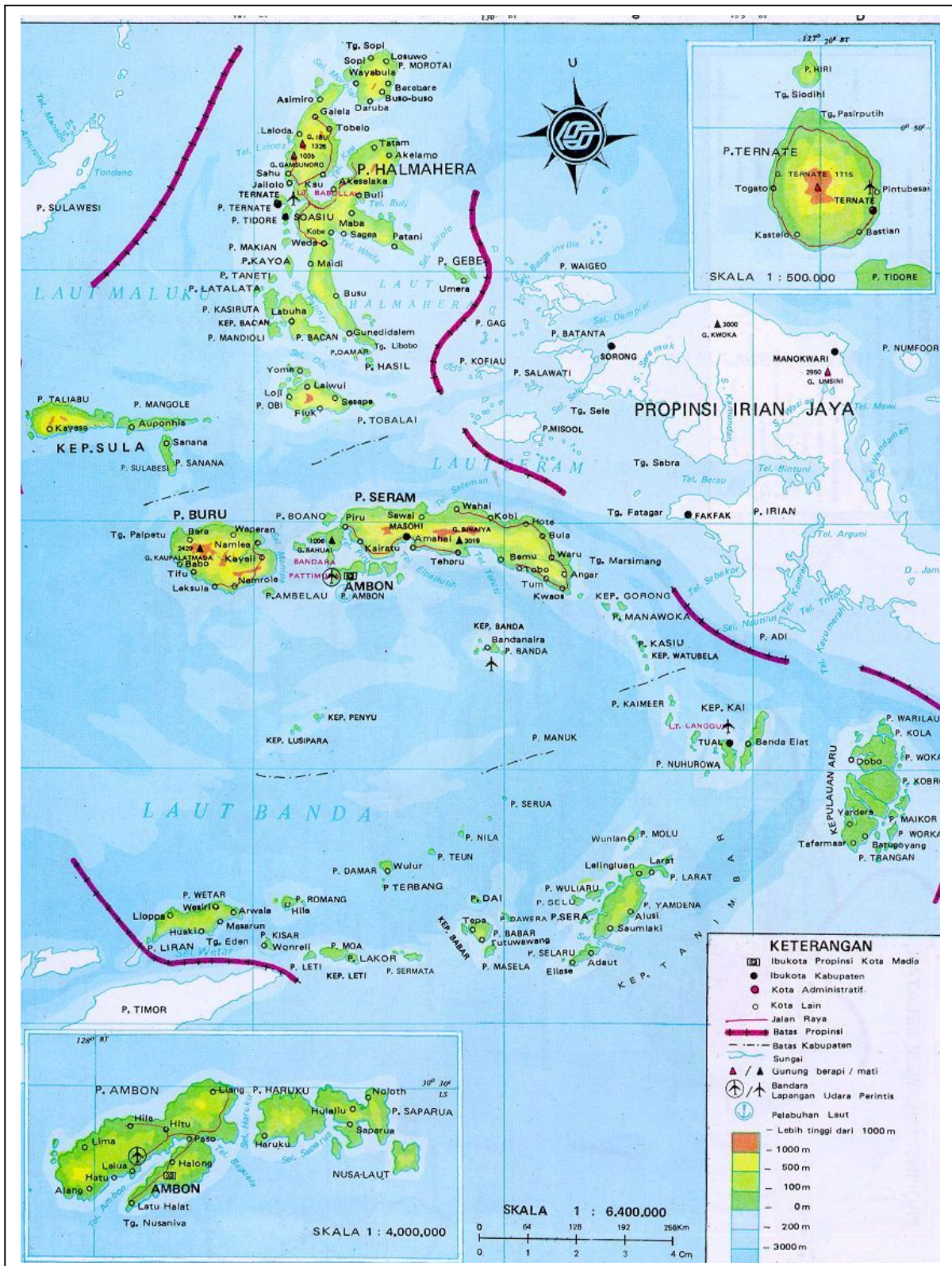
1999年、8月、マキアン人の村と先住民でありクリスチャンが大部分を占めるカオ人、ジャイロロ人の村があるマリフット地域を統合して、新たな行政区マリフット郡が設定されようとしていた。マリフット郡が設立されると郡内でマイノリティになるクリスチャンとムスリムの間には攻防があり、1999年8月、マリフット地域で、ムスリムのマキアン人、クリスチャンのカオ人、ジャイロロ人間の襲撃事件が起る。その後、10月末にクリスチャンによるマキアン人移住者の村全ての破壊という大きな襲撃が勃発し、12月末、トベロ郡、ガレラ郡でのクリスチャンによるムスリムの村への襲撃、2000年5月末には、外部（アンボン、南スラウェシ、ジャワ）からのムスリムの聖戦民兵によるガレラ郡のクリスチャンの村の襲撃などが起った。この間、治安維持の面で、国軍、警察、スルタンや知事の指揮下で新たに編成された治安維持部隊などがあったが、抗争を鎮圧するには至らず、半面、私設部隊による一般市民に治する容赦の無い態度や拷問、同じ宗教者間の襲撃事件などが報告されている。

この紛争では、教会やモスク、家屋が焼き討ちに合い、コーランのコピーが引き裂かれたり、信仰者が生きてままモスク、教会の中に閉じ込められたまま焼き討ちに合い虐殺されたりした。多くの犠牲者や家族を失う世帯が発生し、避難民が発生した。そして、何世代もにわたり、異教徒間でも平和に暮らしてきた地域の社会関係が破壊されてしまった。代表的襲撃事件により、多くの避難民が発生し、テルナテ島やティドレ島へ避難した。2000年初頭、隣のテルナテ島テルナテの街での避難民数は75,000人に達していた。一方、避難したムスリムがテルナテ等避難先へ到着後、フラストレーションや怒りを抱え、それぞれの地域のクリスチャンを攻撃するなどして、抗争が更に拡大した。牧師が殺害され、民家や教会が焼き討ちに遭うなどして、更に避難民が発生した。テルナテから避難したクリスチャンは、ハルマヘラ島のキリスト教居住区であるトベロや他州である北スラウェシにまで達した。

背景には、インドネシアの中央政府の地方分権化政策、地方政治勢力をめぐる争い、国軍の動き、などの政治問題。ハルマヘラの金鉱をめぐる土地・天然資源所有問題、そして、宗教的な対立などがあると考えられている。

参考資料：笹岡正敏編著（2001）『流血のマルク インドネシア軍・政治家の陰謀』インドネシア民主化支援ネットワーク（NINDJA）pp7-9、32-45

3. 地図



出典 : <http://www.euroindonesian.com/country/indonesia/MALUKUMAP.jpg>

4. 海外研修内容

1) Session1 : 国内避難民 (Internally Displaced Persons: IDP) キャンプ訪問

概要・目的: 北マルク州都テルナテ (Ternate) にある IDP キャンプを視察し、紛争後の国内避難民の実態、支援を行う NGO の活動内容を把握する。

プロセス: IDP のキャンプ 3 箇所 (クリスチャン系 1 箇所、ムスリム系 2 箇所) を訪問。国内避難民の生活を把握。また、現在 IDP キャンプ支援を行っている現地 NGO の活動を把握した。

内容 1 : IDP キャンプ 1 (ムスリム系) :

2000 年北マルク州モロタイ (Morotai) 島から避難した IDP のキャンプ。モロタイ島の人口はクリスチャン 20%、イスラム教 80%。大半の家族の収入は、テルナテ市内で、モロタイ島の地場産業である第二次大戦時の廃材メタルなど素材にしたアクセサリーの加工販売。当時の中学校をキャンプとして使っている。IDP は同じコミュニティ単位で来ており 80 世帯。キャンプで生まれた子も多い。1 教室を 2・3 家族でシェアしている。子どもの 8 割が通学しているが、未就学児童も含め家族の仕事を手伝い日銭を稼いでいる。



IDP キャンプ 2 (ムスリム系) :

1999 年北マルク州ハルマヘラ島トベロから避難した IDP のキャンプ。当初は教会に居住していたが教会移転に伴い、軍の命令により現在地の建築途中のビルに移転して 6 年になる。立ち退きの心配の中で生活している。紛争以前は、ほとんどが農業に従事していた。現在は、市場等で運搬等をして収入を得ている。政府からの情報やサービスはなく、住民は公正なサービスを期待している。建築途中のビルに 43 世帯が住んでおり (一世帯約 4~5 人)、現在、25 名の子供達がこのキャンプで暮らしている。子どもは運搬など手伝い日銭を稼いでいる。



問題点 :

IDP キャンプに対して当初は政府、国連支援があったが、現在は政府帰還政策でほとんどの IDP が出身地に戻っている。しかし、中央政府、地方政府管轄局、NGO の IDP 把握データが異なり、IDP キャンプの実態把握から漏れていたため、取り残された IDP キャンプが発生した。政府資料では帰還事業が終了したことになり、IDP キャンプ運営が困難な状況である。IDP は低所得のため、児童労働などの問題がある。また家の建設費などを含む帰還事業資金が無いことが主な原因で対策が無い。

帰還先の環境設定が住民側の意向と沿わず延期している例もある。現時点での帰還計画は未定。

支援団体の活動：

現地 NGO の DAURMALA は 2000 年から教育・人権支援活動を行っている。現在の活動は 2003 年から UNICEF 資金で実施。子どもの権利を守るための事業で読書、詩、描画活動などを通して子どもの性的虐待などのトラウマ解消を計っている。UNICEF との協力で子どもの権利の提言活動にも取り組み、これまでに 5 件を立件している。

IDP キャンプ 3 (クリスチャン系)：

もともとテルナテ出身である。テルナテでの紛争から 2003 年マナド (Manado) へ避難移住し、再度テルナテへ戻ってきたが、家が破壊され元の場所に戻れない IDP のキャンプ。もともと工場であった大きな建物を使っている。



支援団体の活動：

現地 NGO の LEMBAGA MITRA LINGKUNGAN (LML) は環境団体だが、退学者のために、無料で公教育と同じ内容を IDP の子ども達に教えている。公教育として認めるよう提言している。ボランティアの学生が 2 年間奨学金を子ども達に出している。

内容 2： 現地 NGO との意見交換

現地 NGO 4 団体 (LEMBAGA MITRA LINGKUNGAN (LML)、IKATAMA、LEBMADES、DAURMALA) の活動、課題などの意見交換を夕食会のインフォーマルな場で行った。

国際機関や各団体活動のコーディネーションの状況。資金調達 (Funding) の難しさ。ムスリム、クリスチャン双方を交えてのイベントを企画しながら平和構築を進めている。テルナテの現状についてなど。



(後藤明子、松崎美和子)

2) Session 2 : ファシリテーション実践

内容 1 : PEKKA の活動

事業背景・概要

- ・ 1999 年インドネシア国内で多くの紛争が発生したのを機に、2001 年、紛争地の未亡人（夫が死亡/離婚）の生活について調査し、紛争の痛手克復、平和構築への貢献を目指し未亡人を支援する枠組みを作成。未亡人家庭のエンパワメントプログラムを開始した。
- ・ ①女性の役割に焦点、②孤独や暴力の対象になる等のステレオタイプの変える、③インドネシア内の武力、土地、経済の紛争を扱い、グループ・アプローチをとった平和構築や経済活動の能力強化活動を行っている。
- ・ 北マルター女性リーダー育成により、上記活動に加え、女性の異宗教間（イスラム、キリスト）の交流、目標をもった活動などを行っている。
- ・ 1, 2 年に一度、女性リーダーが集う Regional Forum、National Forum を開催し、ワークショップによる学びや文化紹介交流（写真）のイベントを行い成果の共有やリーダー間の交流を図っている。フォーラムの企画、運営は女性リーダーによる。資金は PEKKA が提供する。
- ・ なお本事業は、世界銀行日本社会開発基金（Japan Social Development Fund: JSDF）の Capacity Building Grants により行われている。



(伊藤解子)

内容 2 : PEKKA の未亡人女性リーダー育成事業の一環である Regional Forum の 1 セッションにおいて、紛争予防をテーマに 4 グループに別れて、実際に女性リーダーを対象にしたワークショップのファシリテーションを実践した。

Group 1: Analyzing conflict situation

(ファシリテーター：後藤明子、鈴木泰生、通訳・アシスタント：Kodar)

目的 : 紛争を分析することで、その発生原因が広範囲かつ複雑な問題が絡み合っていることに気づき、決して目の前におきている感情的な出来事の上に成り立っているわけではないことを知り、建設的な考え方、視野にたつて将来を考える力をつけることを目的とする。

プロセスと内容 : ゲーム、グループワークを通して、それぞれが conflict の要因、実情、結果を分析し、発表を通して様々な要素を共有化する。

- ・ 風船割りゲーム 紛争発生のプロセスがこのゲームに類似していることを実感してもらう
 - ・ 5つの質問事項を提示し、3グループに分かれ話し合いを行い発表
 - ・ 意見交換を実施し、体験、考えなどを共有化し conflict について分析をまとめる
- 質問内容： 以下に質問内容、参加者からの意見を要約
- 1) 紛争はどのようにはじまるか(原因)
 - ・ マリフット (Malifut) 地区とカオ (Kao) 地区の権力争い
 - ・ 社会的な格差に対するねたみ
 - ・ 権力・地位の獲得
 - ・ 扇動者がこの機会を利用
 - ・ 住民が扇動者・噂をたやすく信用
 - ・ 相互不信
 - 2) 損をするのは誰か
 - ・ 全員が犠牲となる
 - 3) 紛争で得をするのは誰か
 - ・ 扇動者→コミュニティの disunite に成功
 - ・ 政府&村の行政機関
 - 4) なぜ紛争が他地域へ広がるのか
 - ・ 復讐
 - ・ 扇動 (誘惑) — 住民が信用した



- 5) 紛争が終わるのはいつか。またその紛争はなぜ終わったのか
 - ・ 双方の治安部隊の自覚
 - ・ 鍵となる人物の会談：宗教・伝統的な指導者、政府、住民
 - ・ PEKKA：平和というミッションを持ち込んだ
 - ・ 和平の推進をした
 - ・ 他のコミュニティを remind

した
所感： 紛争を各自が分析することにより、広い視野で要因、実情などを把握することができたと思う。またこの結果、こちら側が意図していなかった、今後自分たちがどうあるべきかという観点からの意見も出され、ワークショップは目的以上を達成。通訳の Kodar から学ぶことも多く、今後に繋がる経験ができた。

(後藤明子)

Group 2 : “Community based involvement in conflict handling”

(ファシリテーター：飯塚明子、鈴木晶子、通訳・アシスタント：Jerald)

目的： Coordination among all actors is necessary for peace building

- プロセスと内容：
- 1) ファシリテーターの自己紹介
 - 2) アイスブレイキング；日本の歌“大きな栗の木の下で”を振り付で歌う
 - 3) グループに分かれて紛争のイメージを画用紙に描いてもらう
→絵の説明「なぜその絵を描いたのか、どのような場面なのか」
→平和構築の必要性を認識する
 - 4) 平和構築のためにはどのようなアクターが関わっていく必要があるか意見を出してもらう。→・住民・宗教指導者・cultural leader・政府（軍、警察、教師含）・NGO
 - 5) 各グループに一つのアクターを担当してもらい、それぞれのアクターがどのように平和構築の一役を担うのか議論し、何をすべきかを模造紙に書いてもらった。

住民：

- ・良いことを言う
- ・静かに過ごす（あまり目立った発言や行動をしない）
- ・近隣の人が協力して地域の家や宗教施設を再建する

宗教指導者：

- ・宗教的な祭りの際に信者以外も一緒に祝う（ex:イード、クリスマス）
- ・互いのために祈りを捧げる
- ・互いの宗教を知る機会を増やす（教会やモスクでの講話の中で）
- ・平和をテーマに講話をする

Cultural leader：

- ・ローカルの言葉を使用する
- ・手仕事（平和のメッセージを込めたクラフト制作の指導）

政府（軍、警察等）：

- ・conflict 中はもっと軍を投入すべきだった
- ・conflict が終わった今、軍の削減

NGO：

- ・対立していた人を対象に技術訓練を行う（ex：ココナッツオイルの作り方など）
 - ・複数の村を対象にした会議の開催
- 6) まとめ：神戸・スリランカの事例を紹介しながら、各アクターが平和構築のために行動を起こし、住民一人一人が参加することが重要であると同時に、アクター間の連携も重要であるというメッセージを送った。
 - 7) Cooperation のアクティビティ
グループのメンバー全員が紙の上に乗る。その後、紙を半分に折るが、協力しないとグループメンバー全員は乗れない。参加者は片足で挑戦したり、互いに抱き合ったりして協力しながら紙の上に乗った。言葉だけではなく、協力の必要性を実感してもらった。
 - 8) セッションの終了
最後にアクティビティの意味を伝え、全員が参加し、協力することの意義を伝えた。そして、セッションの冒頭に歌った“大きな栗の木の下で”の意味を伝えた。

この歌は日本で古くから母親が子どもに歌って教えてきたものである。栗の木の下には影ができる。暑い日には誰もが影の下に入りたいが一人が場を独占するのではなく、皆で仲良く影の下で休もうという意味であるが、この歌詞の影とは資源を表しており、資源は無限に存在するものではなく、人々が協力しあって分け合いながら仲良く暮らすことの重要性を教えている。そして終了前にもう一度“大きな栗の木の下で“を全員で歌ってセッションを締めくくった。



(鈴木晶子)

Group 3 : Building a Trust Environment

(ファシリテーター：小山直行、鈴木幸子、通訳・アシスタント：Romlawati)

目的： 信頼醸成のためにはコミュニケーションを取ることが大切であるという気づきのきっかけ作り。

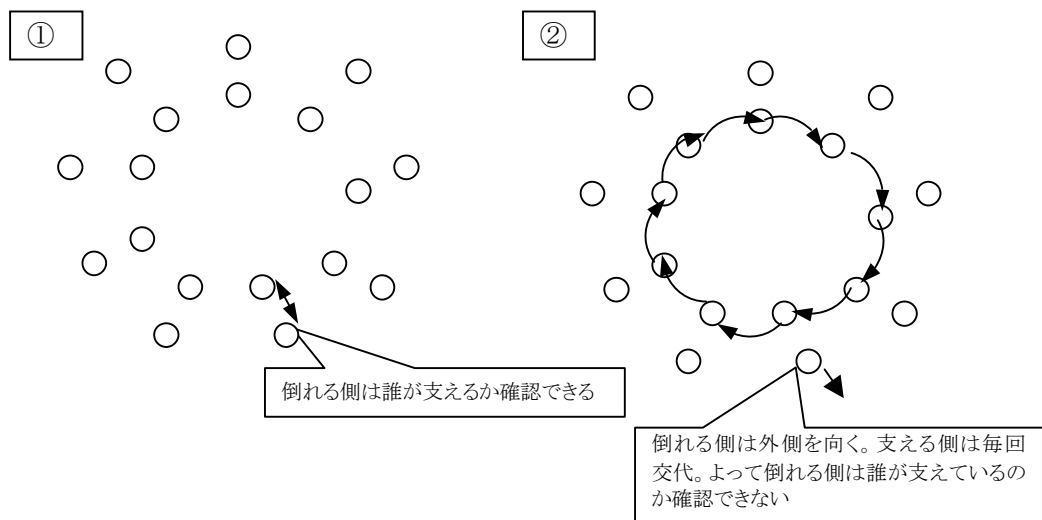
プロセスと内容： 「信頼」そのものは目に見えない抽象的な概念なのでゲームを主体としてディスカッションも混ぜそれらのアクティビティを通して気づいてもらうよう促す構成。

1) ウォームアップ

日本の遊び「だるまさんがころんだ」の紹介。参加者に親しみを持ってもらえるよう、インドネシア語で「サルが木からおちた」という名前を用いた。フォーラム会場の外へ移動し、オニ役を参加者の中から募り実施した。参加者多数のため、オニが振り返った際に止まらない人をなかなか指名できないという問題はあったものの、少々移動し雰囲気を変えたこともあり、場がリラックスした。

2) ゲーム 1 : “Trust Fall”

二重の円を作りペアを組む。全員円の外側を向く。外側の人が内側へ倒れ、それを内側の人が支えるというゲーム。



②のほうが①より恐怖感をおぼえると答えた参加者が多かった。それはなぜか？誰が支えてくれるか知らないからではないか？このゲームのメッセージは、信頼感を抱くためには、まずお互いを知っていることが大切であるという点であった。

ディスカッション：紛争前後で気持ちにどのような変化があったか？

ディスカッションまとめ

紛争前：安心・安全、異教徒間も信頼しあっていた、寛容だった等。

紛争後：安全ではない、異教徒を信用できなくなった。一方、相互不信の気持ちは消え、紛争を経て互いの同朋意識が強まった、と答えたグループもあった。

紛争により他者への信頼感が薄れたとしても、これからそれを回復していくためには、お互いをよく理解することから始めなければならないということが、多少なりとも体感的に理解できたようである。

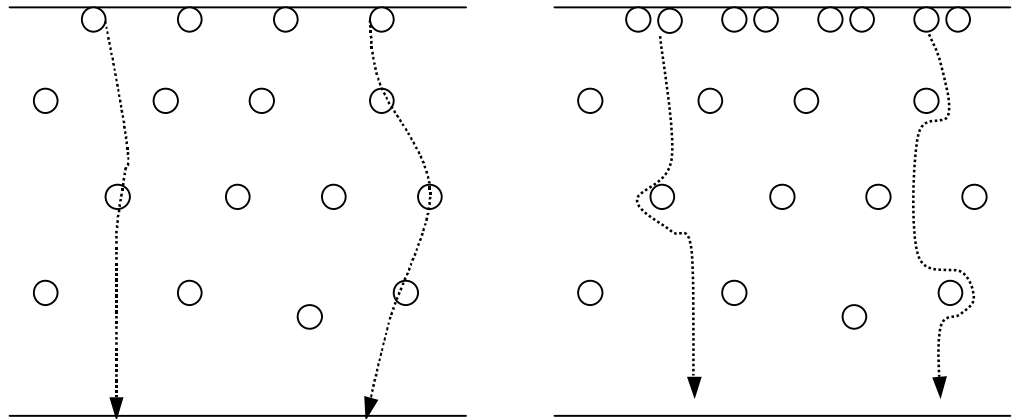
3) ゲーム 2 : "Walking Blindfolded"

ゲーム 1 の内容を踏まえ、互いを知るために必要なことについて気づきを促す。

下図で上側の線がスタート地点。目隠しをしたまま歩き反対側にあるゴールを目指すもの。目隠しをしている人以外は、障害物となり行く手を阻む。

1) 自力で挑戦

2) 目隠しをしていない付き添いととともに挑戦



1) の場合、障害を避けることが難しい。障害を避けるよう言葉をかけてくれたり手を引いてくれたりする人がいるので、2) のほうが易しい。学び⇒困難を乗り越えるにはコミュニケーション（自ら話す・聞く）をとることが大事というメッセージが伝えられた。



所感：

- ディスカッションの内容について、個人差がかなりあるように見受けられた。イスラム教徒とキリスト教徒が混ざったグループディスカッションのため、宗教コミュニティ間の意識の差は未知。
- アクティビティ主体のセッションではあったが、国内研修（10月）の内容をアレンジし、各エクササイズにバリエーションを設けたことにより、参加者がメッセージを受け取りやすいよう工夫をした。
- 参加者が多数かつ、インドネシア語でのコミュニケーションに困難を感じる参加者がいたため、指示が思うように伝わらず、こちらからの説明や問いかけに時間がかかった。⇒アクティビティを参加者が消化（＝コミュニティの実生活への結びつけ）する十分な時間を確保できなかったが、上記の工夫により参加者へのクリアなメッセージを伝えられたものと思われる。

（鈴木幸子）

Group 4 : 平和構築に必要なリーダーシップ

(ファシリテーター：堤由貴、伊藤解子、通訳・アシスタント：Nani)

目的： 紛争後、平和を実現・取り戻していくためには、リーダーシップとして何が必要であるかを認識する。

プロセスと内容： 1) アイス・ブレイキング 身長順、年齢順に列を作って並ぶ。参加者相互を知り、緊張感を和らげる。

2) 悪いリーダーシップをとるファシリテーター (A) が、参加者に簡単な質問をし、参加者から意見をあげてもらい、(A) がまとめる。

① (A) から参加者への質問…ハルマヘラの自慢な点は何か？

(A) は自分で質問し、参加者の話を聞く前に自分で答え (スピードボートが楽しい、ダイビングができるなど)、それを次々に模造紙に書き込んでいく。自分のペースで話をし、参加者に話し合う時間を与えない。

② 参加者に話を振り、何人かに発表してもらおう (金の採掘、豊富な天然資源や海産物など)。多少模造紙に書き加える。

③ まとめは、強引に (A) が自分で答えたハルマヘラの良い点とする。

3) 良いリーダーシップをとるファシリテーター (B) が、参加者に簡単な質問をし、参加者がグループごとに話し合い、(B) がまとめる。

① (B) から参加者への質問…日本について知っていることを教えてください。

② (B) は、参加者をグループに分け、まず話し合う時間を設ける。また、それぞれのグループの発表の仕方 (相談して発表者を決める) を明確にし、参加者が話し合っている様子を見て回り、相談にのる。

③ 参加者に十分な時間を与えて発表してもらおう。意見は電気機器、ハイテクノロジーなど。その後、他の情報として PC を使って、日本の着物の映像や農業の写真を参加者に見せ、解説する。

④ まとめは、参加者の意見を重視つつ、(B) が提示した情報も取り入れていく。

4) (A)・(B) それぞれに対し、どのような印象を持ったかを参加者がグループに分かれて話し合い、発表する。

① (A) について…強引、自分で質問して自分で答える、参加者の方を見ない、人の意見を聞かない。話す時間を与えない。

② (B) について…全員に対して注意を払う、話す時間を与えてくれた、様子を気にしてくれた、情報を提供してくれた。

5) 今まで実際に悪いリーダーシップをとる人のケースはなかったか話し合う。

①家庭の中で、夫が (A) そっくりだ。もっと話し合う時間を作って欲しい。

②人の意見を聞こうとしないリーダーもいる。

6) このセッションについての目的を明らかにする。平和を獲得するために重要な役割を担うリーダーには何が必要とされるかを、参加者がグループに分かれて議論し、発表する。

①平和的な思考、人に対する誠実



さ、賢さ、色々な人を巻き込んでいく積極性、人の意見を聞き入れる、忍耐、公平さ、正義、批判的、アカウンタビリティ、人や資源の管理…など。

②①のそれぞれの項目に関して、具体的な例など挙げつつ、何が必要とされるかをまとめる。

所感： 意見を出す人やそれを発表する人はある程度限定されていた。(A)と(B)のファシリテーターの印象を比べる際、(A)に対しては言いづらい、かわいそうという遠慮が見られた。しかし、会ったこともない外国人のファシリテーター(伊藤・堤)に対しても、PEKKA代表であるナニとの信頼関係ができているために、積極的にセッションに参加し、楽しんでくれていたようだった。何より通訳であったナニの言葉に代えてファシリテーションをしてくれたことが有効であったといえる。

(堤 由貴)

3) Session 3 : ワールド・ビジョン・インドネシア 北マルク地域事務所訪問

目的： ハルマヘラ島で活動する国際 NGO ワールド・ビジョン・インドネシア（以下 WVI）の活動を、NGO、カウンターパート、対象者を訪問し把握する。

内容 1： WVI 事務所訪問



1) 面会者：Alex Tristan 氏（地域事務所長）、Portunas 氏（チームリーダー）、その他教育および農業担当スタッフ

2) 概要：WVI トベロ (Tobelo) フィールド事務所は、チャイルド・スポンサーシップが主要な活動資金元であるが、北マルクおよびアチェでは現在チャイルド・スポンサーシップは行われていない。北マルク州においては、4 箇所事務所 (Tobelo(メインオフィス), Galera, Kao, Soasio) を構える。子どもに焦点を当てた支援活動を教育や農業などの分野で行う。平和構築とプログラミングという観点からは、平和構築そのものに焦点を当てるといよりも、教育なり農業なり各プロジェクトの中に基盤として平和構築の要素を盛り込んでいる。なお、北マルク州における WVI の受益者層は女性・男性およびイスラム教徒・キリスト教徒の割合が半々とのこと。

3) スタッフ自身の平和構築

キリスト教精神を基盤とした団体ではあるものの、WVI 北マルク事務所には、イスラム教徒のスタッフも多数在籍しており、まず、スタッフ間で平和構築を実践している。具体的には、研修などの際に異教徒間でコミュニケーションをはかる機会を設けている。

4) 紛争下における緊急支援戦略

紛争の真っ最中は、国際スタッフおよびインドネシア人スタッフでも他地域出身者は避難し、地元出身のスタッフはプロジェクト地に残り、コミュニティを巡回し、紛争の沈静化をはかった。

5) 教育プロジェクト

① 地域に根ざした子ども向け雑誌“Harmonis” (写真) の発行：

地域の 121 校へ配付。当初はジャカルタの編集チームにより製作されていたが、今は北マルクで担当し、また、言語も北マルクの方言を織り交ぜたインドネシア語を用い、コミュニティの人々が編集に関わっている。「平和構築のための効果的な媒体」と WVI スタッフ。

② 教師を対象とした研修：

平和構築の概念をコミュニティに普及させる場合まずアプローチするのは通常教

師とのこと。これは、教師がコミュニティにおいて尊敬される存在であるためである。教師向けの研修は、平和構築に特化したものというよりは、教師の多くが抱える問題（子どもにやさしい教授法、non-violent classroom management 等）を扱う。研修時は教育省よりトレーナーを迎えて実施する。研修に参加する教師は、バックグラウンドの異なる人たちで、ジェンダー、宗教、経験年数などでバランスを取るよう配慮している。

6) 農業プロジェクト

Kao および Malifut 地区にて実施。環境に悪影響を及ぼさず収穫量を増加させる有機農業を導入。ジャワ島などからの移民（耕作）と先住民（焼畑）が互いの農法を相互に学ぶことを通した平和構築を目指す。

内容 2： カウンターパート訪問

1) 村のガバナンス向上を通した平和構築

訪問した村：トベロ郡ポピロ (Popilo) 村

面会者：村長、村議会議長

2) 地方分権化について村の自治組織の機能等

1. 村議会：この村では 7 名の議員から構成されている。村民の協議を経て合意のもと選出される。

2. 村議会の機能：①村民の抱える問題や考えを話し合い、上位レベルの行政（郡、県）へ伝える。②村の行政が村民の意思に沿ったかたちで執行されているかモニターする。③インドネシア主流の慣習と相反しないかたちで地元文化を振興する

3. 平和構築において村議会が果たしてきた役割：祭事などの機会に訪問し合う。文化的イベント（例：イスラム教徒・キリスト教徒それぞれによる合唱グループ）。スポーツイベント。

村行政に携わる人々は、このようなコミュニティの伝統・文化に根ざした行事が平和構築に役立ったと感じている。

和平に効果的な「アクター」に関しては、コミュニティ主導による平和構築の取り組みにおける宗教指導者の役割については重要ではあるものの、彼らが特別に大きな役割を果たすというよりは、コミュニティ全体を巻き込むことが重要だとの見解。

3) コミュニティが直面した問題例



例 1、燃料費引き上げについて：

政府が貧困世帯を対象に補償（30 万ルピア×3 か月）で対応したが、選定基準は中央によって決定され地域の実情を反映していない。また、補償プロセスも明示されなかった。そこで、村民の意見をまとめ村長が統計局に対し申し入れを行った（回答待ち）。

例 2、迷惑行為（暴力、飲酒、破壊行為等）が起きた場合：

話し合い⇒和解⇒関係者訪問⇒罪の許しという一連のプロセスを経る（加害者から被害者への補償は特に行われない）。

WVI スタッフによると、「コミュニティレベルの平和構築は順調に進むが、マルチレベルでの平和構築が「外部者」によって阻まれている」とのこと。また、訪問した村では実例がないものの、コミュニティレベルで争いが起きた際の、上位レベルの行政からのサポートは消極姿勢で最小限となっている。

所感： 訪問を通して、WVIによる「現場へ行く前にまず内部で平和構築」という取り組みには納得させられた。また、WVI スタッフによる説明を踏まえコミュニティでの平和構築の進み具合を視察したわけだが、この紛争が「外部者によってもたらされた」という認識が予想以上にコミュニティの間に浸透しており、よって、コミュニティレベルでの和平を推進するガバナンスは順調に進んでいるように見えた。

（鈴木幸子）

内容 3： 対象コミュニティマムヤ村の WVI のターゲットグループの訪問

2006 年 2 月 3 日、北マルク諸島のハルマヘラ島のトベロ(Tobelo)にあるマムヤ村(Mamuya Village)の World Vision Indonesia(WVI)のターゲットグループを訪れた。Village Secretary、head of BPD、漁業と農業それぞれのコミュニティリーダー、WVI の現地スタッフから話を聞いた。

1) 地域概要

この地域ではモスリムとキリスト教徒の 500 家族が住んでいる。1999 年に紛争が発生した時に、すべての家族がそこから避難したが、現在は全員戻って来ている。しかし、戻ってきた時は家や漁具などほとんどの財産を亡くし、耕していた畑も草が生い茂って森のようになってしまっていた。WVI は紛争前からこの地域で Happy House（2つの民族の子どもが学校終了後、帰宅するまで立ち寄って遊ぶ場所）の運営などの活動していたが、紛争時には外国人スタッフは退去し、紛争が鎮火してから再び戻ってきた。

2) 活動について

ここでは、現在行われている 2 つのプログラム、①平和教育プログラムと②農業・漁業プログラムについて住民の意見を聞いた。

① 平和教育プログラム

学校のシステムをとおした教育プログラムと地域コミュニティをとおしたプログラムの両方がある。このプログラムは、子どもたちを励ましたり、動機付けしたりしながら子どもたちの意欲を増していく効果があった。現地



の人によると、紛争前までは異なる宗教の人々は敵というように考えていたが、今では友達であり家族であると考えようになった。子どもたちにどのように変化がもたらされたかと聞いたところ、先生から一方的に教えるという先生中心の教育から、自分たちの意見を述べたり想像力を高めたりして、自信を持って積極的に学習するようになったという意見がでた。さらに、現在は閉鎖している Happy House を運営してほしいという要望があった。

② 農業・漁業プログラム

両方の民族が一緒に農業や漁業について研修を受ける。このこの地域の人々は農業と漁業の両方の仕事に従事していて、昼間は主にココナツの世話をし、夜は漁をする。現地の人から伝統的な農法や漁法から近代化するためにお金や資本を得たいという強い要望があった。例えば、農業では牛を使うのは効率が良くないから、機械や殺虫剤や品種改良された種を使いたいとか、漁業では櫂を使ってこぐ小さなボートではなく、大きなボートがほしいといった要望があった。WVIの現地スタッフによると、WVIのポリシーで支援の7割を教育や訓練などに使い、3割を直接的な物資の支援に使うことになっているという。

(飯塚明子)

4) Session 4 : Padamara (現地 NGO) 訪問

目的： ハルマヘラ島で活動する現地 NGO と活動対象地域を訪問し、その活動と現状を把握する。

内容 1： 現地 NGO Padamara 訪問

活動内容、現地コミュニティの対応や活動する中での問題点をヒアリングした。

1) Padamara 概要

1989 年にキリスト教がコミュニティエンパワメントを目的に設立した Saro Nifero (SANRO) Foundation の 3 機関の一つ

- ① Padamara：2002 年にハルマヘラ地区の人材育成と平和教育のため設立されたトレーニングセンター。3つのセクター（ビジネス、会計、農林業）を中心にトレーニングを実施している。
- ② PPLP (Pusat Pengkajian dan Latihan Pengembangan Pedesaan)：70～80 年代の地域の発展問題を受けその研究を目的に設立された。
- ③ SARO NIFERO：2001 年から活動するクレジット・ユニオンで、約 900 人の収入の少ない家庭に対し、ローンを行っている。安定した収入の確立で、紛争などの問題から離れることを目的としている。メンバーの多くが、小さな店を開き、現地で取れる作物などを売っている。

2) 職員:60 名

- ・ 大半がクリスチャン、ムスリムは 5 名、半数がパートタイム。
- ・ ハルマヘラ島出身者は少なく、ほとんどがアンボンなどから来た。

3) 生徒：約 600 名

- ・ ほとんどがクリスチャン。
- ・ トレーニングは誰にでもオープンである。ムスリムの生徒が少ない理由は、Padamara は母体がキリスト教なので、クリスチャンのためにあると考えられていること。今後はムスリムのスタッフを増やすように努力したい。

4) トレーニング：

- ・ 平和教育の教育の一環として、宗教の授業を取り入れているが、偏った授業の仕方（クリスチャンはキリスト教のみ）をしている。お互いの事が理解し合えているのかが疑問であり、この問題を解決するために、キリスト教とイスラム教を混ぜたクラスを作る計画をしている。
- ・ 他に、SANRO のアイデアとして、10 ヘクタールある土地を「平和地区」と指定し、昔からある文化を取り入れて、平和な「村」を作ろうとしているが、資金不足などが原因でまだ現実化していない。
- ・ トレーニングでは、①紛争予防のための資源や資産管理方法。②次期のトレーナー養成と、コミュニティ管理の指導、③コミュニティ内の問題意識向上、問題解決能力強化。④コミュニティ同士の信頼向上、新しい農業技術導入のための仲介（コミュニティ同士がなかなか共有しないことに対し、共有することの利益を伝え、コミュニティのモチベーションを高める）などを行っている。

5) 成果と課題

- ・ 事業前は、新しい技術導入で、農作物の種類が豊富になった。そもそも住民は、時間があるときにだけ農業をしていたが、農業能率向上のため、定期的に農地で働くことになり、その習慣を変えることが大変難しかった。
- ・ トレーニング後、生徒が各村に戻ると元の生活習慣に戻ってしまう事が問題点

であり、この改善のために、サステナビリティの強化が必要である。

- 事業運営資金調達が難航し、スタッフ雇用の持続性が問題である。学位と異なり、トレーニング学校の修了証の価値が低いため、生徒が増えない。
- 紛争後の国際 NGO 事業について、復興に関する事業（物資支援など）は良かつが、Community Development や事業の持続性に関する評価は高くない。
- コーディネーションについて、同地域での事業の重複を避けるために現地 NGO を含んだコーディネートが大切である。現在、ハルマヘラでは現地 NGO を含んだコーディネートは行われていない。



内容 2 : Padamara のターゲットグループ訪問

活動対象者（ターゲットグループ）のコミュニティから、Padamara との関係やその活動に関する意見、問題点などについてヒアリングした。

住民の多くが農民で、紛争時は村から避難、トベロに 2 年ほど避難民として滞在、紛争後行政の帰還事業で再び村に戻った。村の家（イスラム教徒、キリスト教徒ともに）の多くは焼きうちにあった。

村にはコミッティがあり、1991 年から 1998 年（紛争勃発）まで、外からの資金援助無く、主に農業、教育、社会開発、経済などの面で協力して活動してきた。紛争後は新しいコミッティ（メンバーは 23 人）を立ち上げ、村の問題解決、教育促進、家の再建、農業援助などを目的に活動をしている。

- Padamara との関係は、1991 年に住民が研修参加して始まった。
- 家の再建：紛争後の行政支援は、再建必要額の 30%であったため、村全体で再建活動を行った。この事業に参加を希望する住民は、自主的に支援金をコミッティに払った。抽選で再建する家の順番を決定し、村全体で該当する家の再建を行った。全参加者の家が再建されるまで継続され、結果として 3 年かかった。
- コミュニティの結束：結束を高めるため、祭典がある時は、宗教に関わらずお互いの家庭を訪れ、一緒にお祝いをするを推進した。
- 農業の向上：新しい技術などを教える研修を実施している。これにより、以前無かった新たな作物栽培が可能となった。住民の収入も少々改善された。
- 女性グループ：村の 19 人がメンバーとして活動。女性の農業参加を推進する他、家庭内のスキルを教えたり、イスラム教の家庭と一緒に養鶏を行ったりしている。SANRO の研修は、女性による事業運営の手助け、農業技術。
- SANRO のトレーニングは村のリーダーなどを中心に数人しか招待しないので、コミュニティメンバーがなかなか参加することができない。
- 農業は個々の畑でおこなっているため、収入を多くするには、組合などを作り、

一緒に働くことが望ましい。

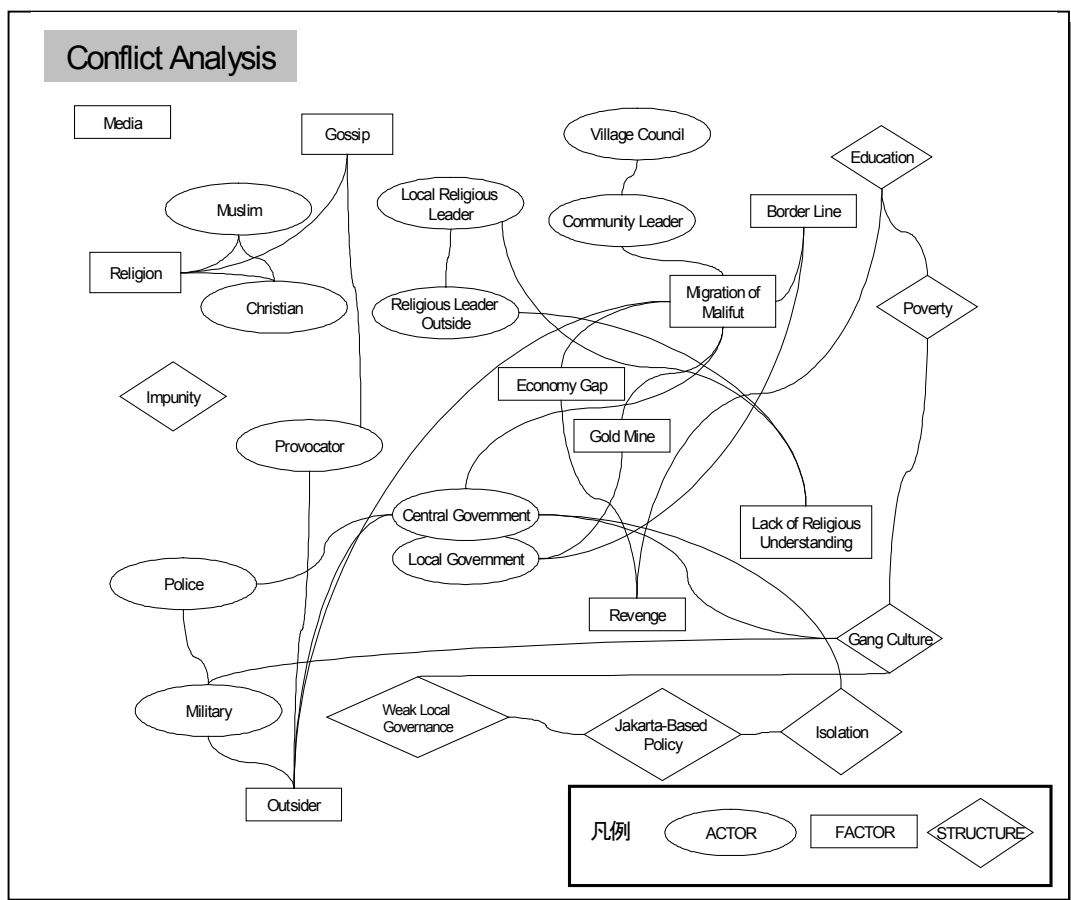
- 住民と一緒に畑で働く時に紛争のことなどを話すこともあるため、平和教育につながっている。



(鈴木泰生)

5) Session 5 : Workshop 1 - Conflict Analysis

- 目的： 紛争災害の復興支援に携わるために基本となる紛争の仕組みの分析を学ぶ。
- プロセス
と内容： 1) Jerald 講師から紛争の分析には、〈Actor〉〈Factor〉〈Structure〉の3つの要素があると説明がなされた。
- 2) 北マルクの紛争について上記の要素について挙げた。参加者を3つのグループに分け、それぞれに割り振られた「要素」に関して、これまでの文献や聞き取りでの調査を通じて理解している事柄をもとに、議論の上、短冊に書いて貼り出した。
- 3) 次に挙げられた要素の項目どうしの関連を考え、何らかの関係があるものをテープで繋いでいった。



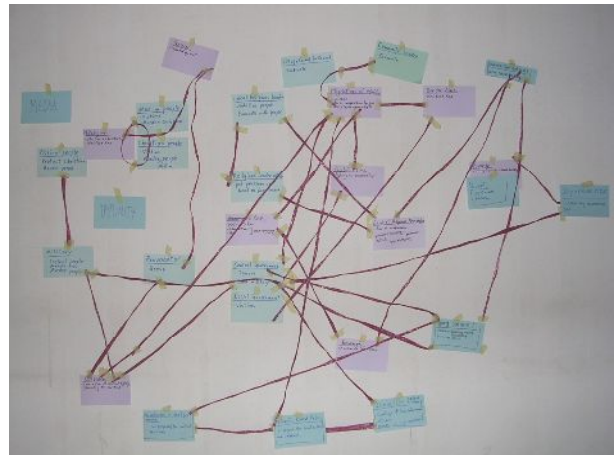
- 4) 結果は図のようになった。
- 5) 出来上がった図からそれぞれの要素がどのように影響しあっているのか、重要性の高いあるいは低い事柄は何であるのかが明瞭に見て取れた。参加者からは関係性の複雑さや政府の位置の大きさ、宗教グループの及ぼす影響の意外な小ささ、などが感想として述べられた。

講師のコメント： この分析をわれわれがいかに関与できるかが重要である。まず、情報を集めることから始めなければならないが、情報源としては、文献、現地の人々、現場で働く NGO、が考えられる。このうち、文献から得られる情報は、全体の4割程度で、残り6割は現場から収集するものである。事前に文献で調査を

しておけば、ある程度の推測も立つので、その後の現場での調査が効果的になる。なお現場での調査では、コミュニティを巻き込んで行うことを忘れてはならない。

一般にコミュニティの人々が、政府や軍といった権力ある相手に対して非難する声を発することはめったにないものである。一方で政府当局や軍は、たいてい紛争の原因を一部の反乱分子や扇動集団（Provocator）に帰するものである。だが、そうした一部の人間とはいったい誰であるかはいつになっても不透明なままである。

したがって、災害復興に携わる者は、まず最初にここで試みたような分析を行い、紛争の構図をよく把握することが極めて大切である。



(小山直行)

6) Session 6 : Workshop 2 - スペシャル・イシュー

テーマ 1 : 紛争下における宗教問題

目的 : 宗教のイメージや考え方を話し合い、それぞれの宗教を信仰する人々に対してどのような感情や偏見があるかを認識し、また、こういった偏見が実際に紛争へと発展するのかを議論する。さらに、紛争を止める・紛争後の復興の際には何が必要かを議論し、理解する。

**プロセスと
内容 :**

1) アイスブレイキング

3種類の動物(ワニ、鳥、カンガルー)を現す鳴き声とアクションを決める。動物の名前を言いながら指された人とその左右の人は決められた鳴き声を出しアクション(左右は間の人に向けたアクション)を行わなくてはならない。輪を作り、真ん中に1人出てオニとなり指名する。間違えた人がオニと交替する。



2) キリスト教グループ、イス

ラム教グループの2つに分かれ、それぞれの良い点、悪い点、イメージ、行動について話し合い、発表した。

- ・キリスト教グループ…多くの宗派がある、欧米人が多い、布教に力を入れている、お金持ち、容赦、発言はするが行動がない、等
 - ・イスラム教グループ…運命論、テロリズム、温厚、排他的、豚や犬に触らない、女性が不利な立場、ジハード、過激、少数派、等
- 人々が他宗教に抱く考えや認識が必ずしもポジティブなものばかりではなく、紛争を招く要因となっているということが確認された。

3) 宗教間の理解の問題がある中で、支援団体が紛争を沈静化したり、復興活動を支援していく際には、何が求められるかを話し合い、発表した。

・ワークショップ1では、異宗教への理解や感情以外に多くの紛争の要因が挙げられた。まず、宗教上の偏見をなくすような教育、会話をするための安全な場所の確保、宗教グループのリーダーに働きかける、等という活動が必要となるが、それだけでは、解決しないほかの問題がある。紛争が起こった原因や状況の分析、紛争前の平和な村の歴史を振り返る、人権の観点から議論を進める、中央政府の役割を明らかにしていく、文化的な対話の促進、メディアの利用する、等といった外の問題に目を向け様々なツールを使った活動が必要である。

**講師の
コメント :** コミュニティのグループの組織化やマネジメント、ハード面での支援を行う際にも、このような要素を取り入れて活動を行っていくとよいのではないかと。

テーマ 2 : 持続性・継続性

目的 : 紛争下で NGO が支援活動を行う時間、予算、地域とのつながりなどの持続性について議論する。NGO には限られた条件があるが、その中でコミュニティの復興が継

続いていくには何が必要かを議論する。

プロセスと
内容：



紛争前、紛争勃発、紛争直後、紛争再燃、復興の期間を区切り、一般的に日本の NGO が、それぞれの期間に、どれだけの支援ができるかということを経量的に計るため、それぞれの期間（年）が書いてある紙の下に果物を置いていく。紛争前は NGO の活動は極少なく、紛争勃発の際にも少なく、紛争後は大量に入り、復興の過程では少なくなっていくという認識を深める。

講師の
コメント： NGO の活動には限界があるが、その中でも、メディアを利用して資源を配分したり、コミュニティが持続的に復興していくために、NGO はコミュニティの capacity を構築していったり、撤退後も経験を共有するなど、つながりを大事にすることはできる。ハード面だけの支援にしても、コミュニティを組織化することを通して行うなどすれば、コミュニティの復興活動は持続していくのではないか。

（堤 由貴）

テーマ 3： 平和構築を測る指標

講師の
コメント： 1) 時間的枠組み、戦略上の達成
・平和は無形であり、いつ「平和」が達成するのかわからない。
-活動を通じた住民へのファシリテーションにより、人々の情報へのアクセスとリソースへのアクセスが同じになる時を達成点と考えてみる。
2) PEKKA の例
・第 1 段階 和解（3 ヶ年）
-指標：グループ活動への参加者数、訓練されたリーダーの数、異宗教間の人々の相互への訪問回数など
・第 2 段階 エンパワメント（3 ヶ年）
-共に生きる方法—定量的、質的「過程をはかる指標」が必要。
実践—異宗教の家庭で食事をした数
価値—他の宗教をどう思うか
能力強化—ファシリテーターになった人の数 など
3) 指標
定量的・質的
プロセス、時間枠、参加者（誰を含める？）—誰のために誰によって
で考えていく。

（伊藤解子）

7) Session 7 : Workshop3: Programming Peace Building

目的： 研修中に視察、ヒアリングした事業の強み、弱みを抽出し、平和構築プログラム実施上のヒントを得る。

プロセスと 1) アイスブレイキング

内容： 輪になって、輪の真ん中のオニが、「マンゴスチンと1回言ったら右に一步飛ぶ」、「ランブータンと1回言ったら左に一步飛ぶ」と決める。輪の中心のオニは、マンゴスチン、ランブータンを好きな数だけ言い、輪を作っている人たちは腕を後ろに組んで指示に従ったアクションを取る。間違えた人はオニと代わる。また、オニが「フルーツサラダ」と言ったら、全員ばらばらに動き輪を作り直す。オニは動いている最中に誰か1人に触る。その人がオニになる。

2) 3グループに別れ、Darmara+LCL (IDP キャンプ)、ワールド・ビジョン・インドネシア (WVI)、Padamara、PEKKA 事業について、それぞれ強み、弱みを議論し、その後それぞれ発表。

①強み

- ・事業：対象者の参加度の高さ、動機の高さ、参加者間のネットワーク、支援開始時期の早さ、現地文化・歴史に適した素材での事業運営、撤退戦略、政策提言能力、住民リーダー育成、女性など弱者を対象とした能力強化活動、ボトムアップの活動、等。

- ・組織：世界規模のネットワーク、政策提言能力、資金源の確保、職員自身が IDP 経験者、職員の宗教バランスがある、事業の資料化能力 (メディア)、等。

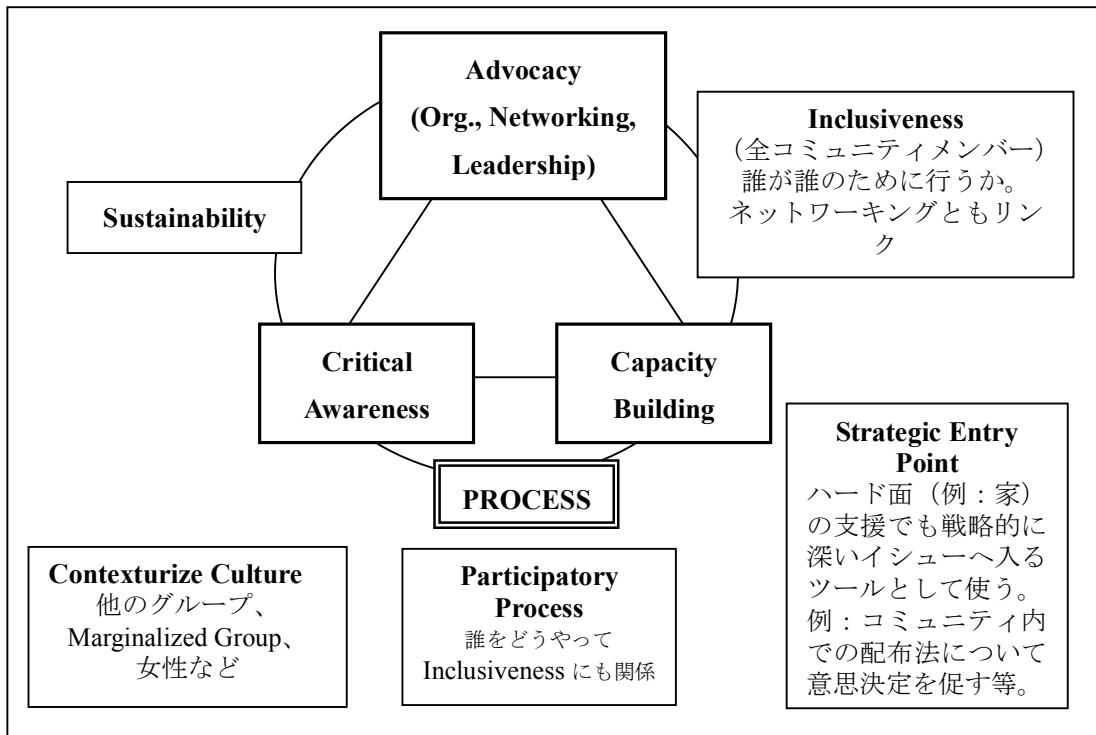
②弱み

- ・事業：対象者の支援されたモノへの依存度の高さ、一宗教への偏り、平和構築の視点の欠如、持続性の欠如、トップダウンの活動、団体の目標と住民の意識のギャップ、対象者以外の周辺の人々とのつながり、男性の参加の欠如、等。

- ・組織：資金、情報、ネットワークの不足、等。

講師のコメント： 紛争後に CO ができるのか？問題について全体的な枠組みでとらえ、「批判的意識」、「能力強化」、「政策提言」という3点から、統合的なアプローチを行う必要性がある。

全てのプロセスにおいて、能力強化、批判的思考、政策対話をファシリテートすることに努める。情報とリソースへのアクセスを得るためには、10年にかかるプロセスである。初期は外部の支援が必要であるが、自ら行っていくように促す。プロセスから得ることは大きく、各団体の専門分野のみで分け隔てる必要は無い。分析から何が可能か導くことができる。



(伊藤解子)

8) Session 8 : Workshop 4 – Facilitation Skill

目的 : PEKKA のフォーラムで行ったファシリテーションから学んだ点と課題を振り返ると共に、国内研修・海外研修を振り返り良いファシリテーターに求められるものを確認する。

目的 1 : あるテーマについての説明方法について、分析する。

プロセスと 1) アイスブレイキング

内容 : オニを独り決めて、他のメンバー見えないところに移動する。残った人は輪を作り、リーダーを決める。メンバーは、リーダーのアクションを真似する。オニは合図で戻り、誰がリーダーか当てる。

2) 最初にメンバーの 1 人に日本の歴史を発表してもらおう。その際に、制限時間や話す内容等の条件は何も与えずに、日本の歴史を話すようにとだけ指示を与える。

発表終了後その発表についてメンバーが感想を述べた。

感想は以下を参照。

<良い点>

- ・長い歴史の中で重要なポイントに絞って話していた
- ・短くポイントのみをまとめていた

<改善点>

- ・アイコンタクトをもっと取るべきだった
- ・一方的に話しているだけだった
- ・黒板を使って年号やポイントを書き出すとさらに理解しやすかった
- ・動作を加えるとよかった
- ・テーマに興味がなかった

講師の 通常の教育システムは「貯蓄型」であり、先生→生徒への一方的な知識の教え込み
コメント : みになっている。NGO の活動においてもこのトップダウン方式が見受けられるが、これでは住民の関心は高まらず住民参加型の活動はできない。それではどうすれば良いのだろうか。

まずは、パワーバランスを変えることが必要である。NGO→住民ではなく、NGO⇔住民というように、対等な関係の中での教えあい・学びあいを行う必要がある、その様な関係性が保てれば住民の中から多くの専門家が生まれるだろう。私たち NGO スタッフはただ住民に情報を与えるために現場に入って活動を実施しているのではなく、共に学びあうために活動を行っているのである。多くの NGO は住民参加型の教育を実施していると信じているが、私たち自身が「貯蓄型」の教育を受けてきたため、無意識で住民に対して「貯蓄型」の教育を実施していることが多い。住民に受け入れられる教育方法を構築するためには長い時間といくつもの困難を乗り越える必要があるが、一度その様な方法が構築されれば、住民は喜んで事業にも参加するであろう。

それでは、住民が心地よく事業に参加するためにはどのような方法が考えられるのだろうか。

目的 2： PEKKA のフォーラムで行ったファシリテーションを振り返りながら検討する。

プロセス
と内容： セッションのペアに別れ、それぞれに内容、良かった点・改善点の発表を行うと同時に各セッションに共通しているポイントを書き出した。

(注：各セッションの発表内容はセッションごとの報告を参照、ここでは総合的な報告のみを行う。)

Group 3 がワークショップで行ったゲーム (2) を試してみた。



1) 内容について：

- ・課題を解決するために行う→リアリティへつなぎ、テーマをサマライズすることが重要
- ・参加者が積極的に参加できる雰囲気作り
- ・課題の関連性

2) プロセスについて：

・言葉の壁が生じることは否めないが、その際に重要なのは通訳との信頼関係である。
ファシリテーターのメッセージを理解し、伝えることができる人である必要がある。

- ・参加者の興味を持続させる困難さ
→周到な準備が必要 (どのような質問が来るのかを予め予想し、どのように応えるかを考えておく) 参加者の表情を読む必要がある
- ・メッセージに異論を唱える人がいた場合、意見を聞くと同時にさらに詳細な事例を出してその人をも巻き込む

ツール

- ・アイコンタクト、ジェスチャー
- ・道具、場所の準備、時間配分
- ・key question を考える
- ・アクティビティ→エクサイティングで挑戦できるもの、単純なもの→誰もが理解でき、気軽に参加できるもの

道具

- ・歌、ダンス、ケーススタディー、ディスカッション、絵を描く、ロールプレイ
グループワーク

講師の

コメント：

ファシリテートする際に重要なポイントがいくつかある。

1) アイスブレイキング

最初のアイスブレイキングは参加者の気持ちを和ませると同時に、ファシリテーターと同じレベルだと思わせることが重要である。そうすることによって参加者が積極的に参加できる。

2) 参加者の個性を覚える

参加者の中でも、積極的にコメントを言う人、なかなか発言をしない人などが出てくるが、話が詰まった段階でどの人に発言を求めるかの目星を付けておく必要がある。また、個別に名前を覚えることも重要であるが、お母さん、おばあちゃんなど、多くの参加者が該当するような枠で呼びかけを行うと参加しやすくなる。

3) メッセージとの関連付け

ワークショップのメッセージは全てのアクターに共通するものである必要がある。アクティビティを実施した後は必ずワークショップのテーマと関連付けたまとめを行う必要がある。

- ・風船の割れる音→ピストルの音→争いは嫌だ→平和の希求
- ・絵を描く→争いを思い出す→平和の希求

4) アクティビティ

参加者が考えられる様なアクティビティを用意する必要がある。そのためには、最初に何を目的としてそのワークショップを開催するのかを考える。次に、そのワークショップでは何を達成するために実施するのかを考える。そして最後に、具体的にどのような道具を使いアクティビティを実施するのかを考える。良い道具を使用することが良いファシリテーターだとは限らず、良い道具を使用しても必ずしもアクティビティが成功するとは限らないことを念頭に置く必要がある。

5) キーワード

ファシリテートする際のキーワードは以下の3点に集約できる。

- ・シンプル
- ・簡単
- ・参加しやすい

参加者が“私も知っている！私でもできる！”という思いにさせることが重要である。

(鈴木晶子)

5. 海外研修写真

インドネシア北マルク州テルナテ島とハルマヘラ島



テルナテからの景色



テルナテ港



海側からみたテルナテ市街



テルナテ側から見たハルマヘラ島



ハルマヘラ島シダンゴリ (Sidangoli) の漁港



ハルマヘラ島ガレラ (Galera)

北マルク州テルナテ IDP キャンプ訪問と現地 NGO との意見交換



ムスリム系 IDP キャンプ



IDP 手前は手づくりの楽器・奥でアクセサリー作り



クリスチャン系 IDP キャンプでの交流



現地 NGO との意見交換



現地 NGO との意見交換



現地 NGO との記念写真

北マルク州ハルマヘラ島カオでの PEKKA Regional Forum



セッション2の準備



ファシリテーション・ワークショップ



ワークショップに参加する女性リーダー



Cultural Night で日本の紹介



Cultural Night



Cultural Night での踊り

北マルク州ハルマヘラ島 紛争の傷跡と帰還事業で建てられた家屋 (左上)



北マルク研修 ワークショップの様子



スラウェシ州マナド空港にて (2006年2月6日)

6. 北マルク研修訪問先団体リスト

1. Daulat Perempuan Maluku Utara (DAURMALA)
Jl. Pemuda No.145, Depan Pekuburan Muslim Kel.Salero RT.002 / RW.02
Kec. Kota Ternate Utara Propinsi Maluku Utara, Indonesia.
2. Yayasan Ikhlas Abdi Utama (IKATAMA) 英訳 : Independent Women's Association in North Maluku
Jl. Skep Kel Santiong, Ternate, Propinsi Maluku Utara, Indonesia
3. LEMBAGA MITRA LINGKUNGAN (LML) = Environment Organization
4. Lembaga Bina Masyarakat Desa (EMMADES)
Jl. Batu Angus Kelurahan Tafure, Gang SMKN,3, Propinsi Maluku Utara, Indonesia
5. SARO NIFERO (SANRO) Foundation
6. Program Pemberdayaan Perempuan Kepala Keluarga (PEKKA)
英訳 : Women Headed Household Empowerment Program
Jl. Lidi, Block A-20/20, Kav. PTB-DKI, Pondok Kelapa, Jakarta 13450, Indonesia
7. World Vision Indonesia, Tobelo Field Office
North Maluku Rehabilitation Office :
Jl. Perikani No.62, Kotabaru – Ternate, Propinsi Maluku Utara, Indonesia

7. 海外研修参加者名簿

	Name	Affiliation and Position	Acronym
Participants			
1	Ms. Akiko Iizuka 飯塚 明子	Citizens towards Overseas Disaster Emergency 海外災害援助市民センター	CODE
2	Ms. Akiko Goto 後藤 明子	Frontline (特活)地球のステージ	Frontline
3	Mr. Naoyuki Koyama 小山 直行	Foundation for International Development/Relief (財)国際開発救援財団	FIDR
4	Ms. Akiko Suzuki 鈴木 晶子	Shanti Volunteer Association (社) シャンティ国際ボランティア会	SVA
5	Ms. Sachiko Suzuki 鈴木 幸子	CARE International Japan (財)ケア・インターナショナル ジャパン	CARE
6	Mr. Taisei Suzuki 鈴木 泰生	ADRA Japan (特活)ADRA Japan	ADRA Japan
7	Ms. Yuki Tsutsumi 提 由貴	Japan International Volunteer Center (特活) 日本国際ボランティアセンター	JVC
8	Ms. Miwako Matsuzaki 松崎 美和子	Children Support Heart & Hand 国際こども支援団体	H&H
Secretariat			
	Ms. Tokiko Ito 伊藤解子	Japan NGO Network for Education, Deputy Secretary General 教育協力NGOネットワーク事務局	JNNE